

国内研修報告書

2020年12月3日に『SDGsで南アジアとつながる、新型コロナと障害者の生活』と題したミニレクチャーに参加し、実際にパキスタンの聴覚障害者の方々とお話しする機会を頂きました。コロナウイルスに対する情報の少なさ、急に強いられたマスク生活、感染リスクとコミュニケーションのバランスなど、そこでは私たちが考えているよりも深刻な現状がありました。コロナ禍においてマスクの着用が必須になりましたが唇、歯、舌、あごの動きや表情などからコミュニケーションをとる聴覚障害者の生活や情報伝達に影響を及ぼしていることがわかりました。また、パキスタンなどの発展途上国では口元が透明のマスクは入手しづらいことも現状の一つでした。ワークショップに参加した37人の9割以上の人々が「通常の口元が見えないマスクによってコミュニケーションが難しくなった。」と訴えていました。これらの現状を聞いて私たちは聴覚障害者用の透明マスクを作成し、寄付をすることに決めました。

私たちの活動の目的は大きく分けて二つあります。まず一つ目はエシカルファッションの要素を取り入れたアップサイクルマスクを作成することによりSDGsの目標達成を目指します。エシカルファッションというのは簡単に説明すると生産に関わる全ての人と地球環境に配慮したファッションのことです。この活動において達成されるSDGs目標は4つあります。まずゴール5のジェンダー平等の実現とゴール10の人や国の不平等をなくすです。今回のアップサイクルマスクにより直接的な不平等が無くなるわけではありませんが、聴覚障害者の人はもちろんそれ以外の障害を持っている人やジェンダー差別を受けている人がいるという実態を知ってもらえるきっかけになればいいと私たちは考えました。次にゴール12のつくる責任とつかう責任です。アップサイクルをしたマスクを利用することにより、消費する人に語りかけると共に地球に配慮したマスクを作成しました。最後にゴール3のすべての人に健康と福祉を促進するというものです。コロナ禍においてマスクは今や必須の感染対策となりました。ですが、聴覚障害者においてマスクというのは会話をすることが難しくなる原因の一つです。そこで透明マスク作成により聴覚障害者の人も困らないコロナ対策を実現できます。

次に二つ目は日本の民族衣装ともいえる着物を利用したマスクを作成することで日本とパキスタンの文化交流が実現されます。また、華やかな着物を使うことで同年代の障害を持つ女性にファッションの楽しさを知ってもらおうと共に、パキスタンにおける女性への敬意を示したいという思いもあります。

これらの目的を達成するためにただ透明マスクを作成するだけではなく、私たちは学校にあるゴミをアップサイクルした環境にも優しいマスクを作成することにしました。学校にはテニスボールや廃材、靴、バトミントンの羽など多くのゴミがありました。その中でも私たちは汚れて履けなくなってしまった靴の靴紐と、折れてさせなくなってしまったビニー

ル傘に着目しました。試作品段階でのマスクの材料は、口元の透明の部分をビニール傘、紐の部分を靴紐、布の部分を使わなくなった着物、針金の部分を使用済みの不織布のマスクの針金です。まずはYouTubeなどで透明マスクを作成している人の動画を見ながら、作成してみました。実際にマスクをつけてみると口元が少し曇ってしまったり、少し口元の動きが見えづらく感じました。パキスタンの方々や法政大学現代福祉学部で日本手話の講師をしている聴覚障害を持った方にも意見を聞く機会を設けました。そこではマスクの布の部分が大きく、透明の部分が小さいため表情がわかりづらいと指摘を受けました。それらを改善し、新たに20個のマスクを作成してパキスタンの方々に送りました。

また、私たちはマスクをより良いものにするために『一般社団法人ソザイクル』に訪問しお話を聞かせていただきました。ソザイクルは家庭に眠る手芸材料を回収し、それを必要とする作り手に届けるという活動を行っています。作り手のもとに届いた素材は、作り手によって素敵でお洒落な新しい作品に生まれ変わります。ソザイクルでは、そんな「作り手」と「材料」をつなぐ、作り手目線のリサイクル&リユース活動を行なっていました。また、無料回収した材料は手作り市やインターネットで販売し、売り上げの中から運営費などを除いた金額を社会貢献団体に寄付しているそうです。実際に活動していて感じることや、活動に対する想いなどをお話いただき、とても充実した時間を過ごさせていただきました。

この活動はSDGsの観点からも着目していて、持続可能な活動にしたいと考えていました。私たちはもう少し活動の規模を広げるために立教大学の福祉に興味のある学生や、法政大学現代福祉学部の日本手話を履修している学生、教員の人たちと協力をして活動を進めていくことにしました。まずはこの活動を知ってもらうために、講義の時間を借りてプレゼンをさせてもらいました。そこで活動に興味を持ってくれた12人の学生と一緒に、夏休みの時間を利用してマスクを作成することにしました。活動本番の前に事前の準備としてオンラインで説明会を開きました。参加してくれる学生の方々には、マスク作成に必要な紐と使用済みの不織布マスクの針金を集めておいてもらいました。マスクの作成活動期間は五日間で、シフトを組み効率よく活動を行いました。五日間で作成したマスクは30個で、私たちの活動の様子やメッセージを添えて、パキスタンに送りました。その後、無事にマスクがパキスタンの方々に届いたと報告があったので交流会をオンラインで開催しました。そこではお礼の言葉とともに、私たちが作成したマスクを着けて笑っている顔を見ることができました。

この活動を通して感じたことは、小さな力も大きな力に変わるということです。初めは三人で始めた活動だったので、かなりマンパワーが少なくマスクを作れる数もあまり多くはありませんでした。でも、活動を広げていくうちに作れる数も増え困っている人を助けられる数も増えました。またこの活動に取り組むにあたり、いつもなら関わることは出来なような多くの人と関わることができました。そしてこの活動を約一年間取り組んできましたが、今までに感じたことのないような達成感を味わうことが出来ました。夏休みのマスク作成では人数集めに加えて、事前の連絡や準備、当日の運営などかなり大変に思うこともあり

ました。しかし、自分たちの手で作ったものがパキスタンの方まで届き嬉しそうにしている顔を見て頑張ってよかったな、こんなに遠い場所でも想いは届くのだと感動しました。

今回の活動のように学生が主体となって、SDGs や社会課題に取り組んでいくことはこれからの社会において必要不可欠であると思いました。決して簡単なことではないけれど、何か行動したい、助けたいという気持ちがあればどんなことでもできると思いました。今回の活動は一区切りとして終了しましたが、これで満足せずこれからもっと発展させて持続的な支援を行なっていきたいと思います。